

審査報告

第10回全国和牛能力共進会は、平成23年6月24日に始まり、出品道府県の最終予選を経て、長崎県において平成24年10月25日から29日にわたり種牛の部と肉牛の部の最終比較審査を行いました。

本共進会は「和牛維新！ 地域で伸ばそう生産力 築こう豊かな食文化」というテーマで開催されましたが、このテーマが示すように、和牛に要求される当面の改良の課題を整理した上で、9つの出品区が設定され、その改良成果の実証と展示が行われました。

今回は、北は北海道から南は沖縄まで、38道府県の参加がありました。多くの候補牛の中から絞り込みが行われ、本年5月末を締め切りとする参加申し込みは種牛1,432頭、肉牛1,254頭の計2,686頭でありました。参加道府県の最終予選を経て、最終比較審査に出品された牛は種牛305頭、肉牛175頭でありました。

審査にあたって適用した審査基準は、予め周知を図ってきました。その骨格は、種牛の部においては、「肉用種としての特徴」を維持しながら「種牛性」の改良に重点を移すことを目標に改正された「種牛審査標準」を適用し、これまでの生産性の観点から配慮してきた過肥と過大に対する対応に加えて、個体間に差がない場合は、種牛性の優れたものを上位とすることです。一方、肉牛の部においては、牛肉の美味しさに繋がる光ファイバー分光測光法による「一価不飽和脂肪酸」(MUF A)の予測値による脂肪の質の評価を肉質の序列決定に取り入れ、肉量、肉質を1:1の重み付けをした総合評価による審査基準を適用しました。

このような審査基準に基づいて厳正に審査した結果の概要は次のとおりであります。

第1区（若雄）

各道府県の改良方針に基づき計画的に作出された種雄牛候補による出品区で、16道県より20頭の出品がありました。ほとんどの父牛が自県産種雄牛であり、地域の生産改良を自らの手で推し進めようとする各産地の積極姿勢が示され、また和牛集団全体としての遺伝資源の確保の観点からも望ましい傾向で出品区の主旨に沿った出品でした。

出品月齢は前回の鳥取全共時より第1区に統合されていますが、今回は15～22ヵ月齢の幅で、測定値としては体高が130.6～146.0cm、体重466～728kgの範囲に分布しました。全体的には、発育良好で体伸、後軀幅は十分でしたが、肋張り、胸幅等がやや不十分で、発育に対する体の幅、体軀の充実という点では課題が残り、惜しまれました。

なお、栄養度が適正範囲を超えたもののなかでも上位を窺えるものがありましたが、全共審査基準に基づき優等賞中位以下としました。

優等賞1席は、出品番号19番「光星」号で、大分県農林水産研究指導センター畜産研究部からの出品でした。種雄牛として申し分のない良好な発育を示し、体高に対する体伸、深さともに備わっており、骨量十分で肉用種の特徴面で高く評価できる若雄でした。特に背腰と肢蹄には力強さがあり、体躯構成の健全性、強健性が担保されていることを窺わせる極めて良好な構造を持ちあわせておりました。また、活力に溢れ、体しまりもよろしく、体躯及び顔から受ける種雄牛としての品位にも富んでいました。なお、発育の上限を超えており、また全体的なサイズと比較すると肋の開張度が伴っていない点は課題として惜しまれましたが、2席牛に対しより体積があり、種雄牛としての性相の点からも上位と判断し首席としました。

優等賞2席は、出品番号15番「絹美継」号で、岩手県農業研究センター畜産研究所種山畜産研究室からの出品でした。輪郭の鮮明さが際立ち、顔品を含めた品位、資質の良好さとも相まって種牛性の高さを良く示していました。体躯は長く、体上線も平直で非常に伸びやかであり、部位的には前躯の幅、深みに富み、充実していました。しかしながら、後肋の伸びを含め、腹容の豊かさ、ひいては体積の点で1席に惜しくも及びませんでした。

第2区（若雌の1）

第2区は全国和牛登録協会認定の改良組合からの出品で、改良組合活動の活性化による増頭意欲の向上とともに、全共への参加者の拡大を狙いとして設けられた出品区であります。また、次世代を担う若雌は、今後の改良の方向性を明示していく重要な役割もあります。

この区には、30道府県から33頭の出品がありました。出品月齢は14～16ヵ月で、体高は121.2～129.4cm、体重は330～460kgでありました。栄養度については「7」と判定されたものが2頭おり、序列を下げざるを得ないものもあり、今後適切な飼養管理がなされるようお願いいたします。

全体の印象は、月齢に応じた良好な発育をし、とくに体伸と体深に優れた個体が多く、体積豊かで、品位も概ね良好でした。一部に中躯の幅と張りに欠けるもの、前躯から中躯への移行がなだらかでないもの、また、皮膚ゆとりや毛質に惜しまれるものが散見されました。

優等賞1席は、出品番号43番「とみの3」号、宮崎県の松本範子さんの出品で、父牛は「勝平正」、月齢は16.2ヵ月、体高は126.2cmでありました。この牛は発育良好で、体積豊

かで体の伸びがあり、とくに若雌らしい品位に優れ、資質も良好でした。さらに体上線が平直で、背腰の強さと幅にも優れ、体躯よく充実し、非常にしっかりとした体躯構成をしていました。体高に対する体の深さにおいて今一息という点はありましたが、輪郭鮮明で体しまり、骨じまりともによく、とくに種牛性に富んだ素晴らしい若雌牛でありました。改正された新しい種牛審査標準の主旨を勘案し首席に決定しました。

優等賞2席は、出品番号36番「みゆき」号、宮崎県の森田直也さんの出品でした。父牛は「美徳国」、月齢は15.3ヵ月、体高は127.4cmでありました。この牛は非常に体積に優れ、とくに中躯の幅と張り、深さ、長さは抜群でした。また、前躯の幅と張りにも優れていました。1席に比べて、体積については勝るとも劣りませんでした。品位、体上線、体しまり、尻の形状の面では1席の方が優れていました。

なお、出品番号34番「こうふく361」号は、とくに前躯に優れており、特別賞として前躯賞を決定しました。

第2区にはいずれも体積に富む素晴らしい若雌牛が出品されました。これら肉用種の特徴を維持しながら、種牛性の改良を進め、生産性の効率を高めていくことが今後の改良の方向性として示されています。これらの牛が、地域の中核になる繁殖雌牛となり、連産性に富む繁殖性にも優れた繁殖雌牛として活躍し、その後継となる産子を多くもうけ、改良組合を益々活性化させることを期待しております。

第3区（若雌の2）

今後、地域の母牛集団に参入し、これからの改良の最先端を担っていく若雌牛の出品区であり、30道県より33頭の出品でした。

出品月齢は17～19ヵ月齢の幅で、体高が122.8～131.2cm、体重391～514kgの範囲でした。全体的には、発育良好で、総体としての体積は十分でしたが、一部にやや長脚のもの、前躯から中躯への移行、肋張り、体下線に課題があるもの等が散見されました。なお、優等賞の上位牛については、総じて高レベルと判断しました。

栄養度については「7」と判定されたものは2頭で、第8回の30%から前回20%以下に、今回は6%と、着実に改善されてきています。2区の状況とも併せ、若雌牛における栄養度管理の徹底は一定の段階に到達しつつあると考えられます。

優等賞1席は、出品番号58番の「ただふく6の2」号で宮崎県の永友浄さんの出品でした。17ヵ月齢で体高129cmと発育は月齢に応じた上限値に位置し、伸び、深さ、体幅ともに十分で体躯全体がよく充実していました。前、中、後躯の釣り合いは側望からも、後望からも抜群、また頭部もやや軽めで、体躯と四肢相互の釣り合いもよろしく、各部の移行は

極めてなだらか、体上線に加えて体下線も平直で、総じて体積、均称面において最上位に位置されるべき若雌でありました。また、体しまりもよろしく鮮明で肩の付着も強く品位に富み、更には、骨味を含めた資質面においても高いレベルにありました。やや皮膚のゆとり、腰角とかん幅の比率等の惜しまれる点がありますが、肉用牛としての特徴並びに種牛性の評価双方において秀逸であり、首席といたしました。なお、この出品牛を特別賞として体積・均称賞に擬賞することといたしました。

優等賞2席は、出品番号55番の「あいこ2」号で宮崎県の林秋廣さんからの出品でした。首席牛と同じ17ヵ月齢で、伸びやかで体上線も平直、体躯全体は非常に鮮明で品位に富んだ若雌牛らしさに溢れた出品牛でした。側望からの均称、中軀における背腰の強さ、肋張り、皮膚、被毛をはじめとした資質等は抜群でしたが、やや尻形、後肢勢が惜しまれ、2席といたしました。

第4区（系統雌牛群）

この区は、前回の鳥取大会から新設された区で、前回大会は、和牛集団の遺伝的多様性の維持拡大を目的とし、希少となりつつある雄牛系統を引き継ぐもの、あるいは、各地域の改良の基礎を造り、かつ今後の遺伝的多様性を担う雌牛系統の掘り起こしを狙った区でした。今回は、それら系統の特色ある遺伝子の保留並びに固定していくための体制を構築し、系統再構築を一層進める段階として位置づけています。また、この区では、各系統の特色と、その斉一性を重視しようという方針から、審査標準による評価や総称「種牛性」項目の評価、そして、それぞれの系統が持つ優れた特色を評価する「特色評価」による審査を行いました。「特色評価」の項目は系統ごとに異なり、本会との協議の結果、その系統の特徴をもっともよく現すと考えられる項目が選ばれました。

出品は13地域から、雌系10系統、雄系3系統が出品されました。いずれの群においても、各系統の特徴や地域の改良経過がよく現れた出品でありました。

本来、この区においては各地域における遺伝的多様性の維持・拡大を目的とした出品区の主旨から見れば、序列をつけるべきではないとも考えられるため、系統の特色がよく現れ、斉一性の高いものから上位5点に序列をつけ、その他に対してはすべて優等賞6席としました。

優等賞1席に擬賞いたしました宮崎県南那珂支所の出品番号131～134番「美福10系」につきましては、特色評価の3項目、「体上線」、「体の品位」、「骨味」において最も揃いがよく、優秀でありました。とくに「骨味」、「体上線」については特筆すべき特徴でした。また、本系統は、繁殖能力とくに分娩間隔にも優れた特色もあり、引き続き本系

統の再構築を進めていくことが望まれます。

優等賞2席に擬賞いたしました大分県玖珠郡和牛育種組合の出品番号127～130番「たから系」についても、「肋張り」、「体の品位」、「肩付」について特色がよく現れていました。しかしながら、斉一性の点からみれば、ほんのわずかですが1席に及びませんでした。地域で長年にわたり受け継がれてきた系統の特色がよく現れた出品でした。

以下、優等賞3席に宮城県みどりの和牛育種組合の「第2横利系」、優等賞4席に長崎県五島和牛育種組合の「こをまさ系」、優等賞5席に岡山県岡山和牛育種組合の「たま系」を選びました。他の出品系統については、系統再構築の重要性や地域における位置づけから、いずれも甲乙付けがたいものとして、優等賞6席で同順としました。

なお、青森県三戸地方黒毛和種育種組合の出品番号87～90番「かとう1系」は、とくに「乳徴」に優れており、特別賞として乳徴賞を、宮城県みどりの和牛育種組合の出品番号95～98番「第2横利系」は、とくに「体の深さ」に優れており、特別賞として体の深み賞を、兵庫县城崎和牛育種組合の出品番号103～106号は、とくに「骨味」に優れており、特別賞として骨味賞を、長崎県五島和牛育種組合の出品番号123～126号は、とくに「体上線」に優れており、特別賞として体上線賞をそれぞれ決定しました。

地域に特色ある系統を掘り起こし、今回の出品に至るまでの各地域での並々ならぬ努力に対しまして敬意を表し、今後の系統の再構築のさらなる発展を期待しています。

第5区（繁殖雌牛群）

第5区は、改良の基になる繁殖雌牛群の斉一性を図るとともに、改良組合の活動から生まれた成果の確認を目的とした出品区です。出品牛には繁殖能力と産肉能力に関する育種価が出品条件になっており、成雌牛4頭をセットとしており、今回は15道県から60頭が出品されました。

出品牛の体高の平均値は134cm、体重は563kgで、栄養度については、多くの県で適切な栄養管理の努力が着実に行われてきていることが窺えました。そしていずれの群も繁殖雌牛としての種牛性に優れた個体が多く見られました。特に上位の群では、体積に富みボリューム感があったことが特徴としてあげられます。

優等賞1席は、大分県玖珠郡和牛育種組合の出品番号187～190番の群でありました。この群は、発育良好かつ体積豊かで、腹容も充分でした。また体各部位の釣り合いが良く、顔品とともに、品位に富み種牛性の高い出品でした。全体的に欠点の少ない群でしたが、やや後肢と尻の形状において惜しい個体が見られました。この群は種牛性において良く揃っていたということで、特別賞の種牛性賞としました。

優等賞 2 席に擬賞いたしました宮崎県西諸県支所の出品番号191～194番の群も、体積に富み、特に体の伸びと深みにおいて優れた牛が揃っていました。また資質も良好で種牛性の高さが窺えました。惜しい点は後肢に今ひとつ力強さが望まれたことです。繁殖雌牛には連産に耐える強健な肢蹄が必須であり、僅差で 2 席とさせて頂きました。

この第 5 区に出品されました繁殖雌牛は、すでに繁殖能力に十分な実績を持っていますが、さらに今後も繁殖を順調に繰り返すとともに、後継牛の保留が進むことを望みます。年齢を重ねますと基礎代謝が落ちるため、余分に摂取した栄養は脂肪蓄積にまわることはヒトもウシも共通しています。粗飼料をしっかりと食べさせ適切な栄養管理を心がけて頂きたいと思います。そして改良の中核的集団である和牛改良組合が益々活性化し、和牛産地の生産基盤の安定と強化が図られることを大いに期待しております。

第 6 区（高等登録群）

この区は本会認定の和牛改良組合を出品単位とした17道県から51頭の出品がありました。前回大会の鳥取全共から高等登録の母牛とその娘牛、孫娘牛 1 群とする直系 3 代の出品に変更されました。母牛の優良な特色が世代を通じて孫娘牛にまで伝わっていること、また、母牛の惜しい点が世代ごとに改善されているかを競う出品区であります。

まず、3 世代を揃えること、かつ、その 3 世代が種牛能力の向上または維持することは非常に難しいものでありますが、今回の出品でもその難しさが窺えます。全体としては発育良好で体積豊かで、品位に富み、均称も良好なもの、また、世代を重ねるたびにレベルアップされた群が多く出品されました。ただ、中には母牛のレベルが非常に高く、娘牛や孫娘牛が母牛を超えることができなかつた群や母牛の特色が十分には後代に伝えられていない出品も見受けられました。

優等賞 1 席は、出品番号244～246番の鹿児島県始良支所、樋脇健治さんを出品代表者とする群で、母牛と娘牛が久米村一盛さん、孫娘牛が反田悟さんの出品でありました。3 頭いずれも発育、体積、均称が良好で、資質や品位にも優れ、相以性も高いものでありました。わずかに体のしまり、肢勢の正しさ、肢の強さが望まれます。

優等賞 2 席に擬賞した出品番号241～243番は 3 頭いずれも宮崎県西臼杵支所の木下富久さんの出品でありました。この出品群は群のレベルとしては首席に劣らないものの、母牛、娘牛に比べ孫娘牛に惜しまれる点があり、世代毎に改良が進んでいる、あるいは、維持している形とならなかつたことが惜しまれます。

なお、238～240番の大分県玖珠郡和牛育種組合の衛藤昇さんの出品は 1 席に匹敵するものでありましたが、3 頭中 1 頭を栄養度「7」と判断いたしましたので、約束どおり優等

賞の中位以下の6席といたしました。

第7区（総合評価群）

この区は第7回岩手全共の連動区として始まり、第8回岐阜全共から総合評価群とされた出品区であります。総合評価群としては3回目になります。現在の和牛生産体系では同じ母集団から次世代の繁殖雌牛と肥育もと牛が生産されています。生産現場では産肉能力に重点が置かれがちですが、生産を継続するためには毎年子牛が生まれなければなりません。したがって、種牛能力が大切な能力の1つです。そこで、種牛能力と産肉能力を兼備したものが求められ、その能力を競う区としてこの区が設けられています。

この区の出品は、種雄牛造成に大きく貢献している育種組合等が存在する道県を対象に、計画的に生産された同一種雄牛の産子で、種牛群は雌牛4頭、肉牛群は去勢牛3頭の計7頭を1群とし、種牛能力：産肉能力を1：1の重み付けで総合評価を競う区であります。当初、15道県から15群の出品を計画していましたが、残念ながら東日本大震災の影響を受けて福島が出品辞退となり、14道県から14群が出品されました。

種牛群

岐阜全共、鳥取全共、今回と回を重ねる毎に出品牛のレベルが高くなりました。発育、体積に優れているだけでなく、品位に富み、均称も良好で種牛性も高く、また、各群の揃いも良好でありました。出品牛の父牛は、鳥取全共では「平茂勝」の息牛が14群のうち8群と多く占めましたが、今回は4群と半減しました。世代交代が進んで、次世代の各地区特色ある種雄牛造成に取り組んだ結果が窺えます。

種牛群第1位といたしましたのは、出品番号298～301番の宮崎県西諸県支所からの出品で、発育、体積、均称、品位、毛質が良好で、種牛性かつ相以性が非常に高く、今回の第10回長崎全共出品全頭の中でも群を抜いた出品でありました。また、この出品の父牛「美穂国」は第9回鳥取全共で同じ第7区で農林水産大臣賞に輝いた「糸北国」の息牛で、この5年間で世代交代を実現されたことは特筆すべきものであります。この実現に努力された関係者の皆様に敬意を表します。

なお、出品牛298番～301番は相似性に優れていましたので、特別賞として斉一性賞といたしました。

第2位は出品番号302～305番鹿児島県曾於和牛育種組合からの出品でありました。出品牛の父牛「金幸福」は第5栄光系「金幸」の息牛であり、第9回全共若雄後代検定牛群に出品されたものです。この群の出品も発育、体積に富み、品位も良好で良く揃っていて高

レベルでありましたが、わずかに体しまり、骨味に惜しい点が認められました。

肉牛群

総合評価群の肉牛群の枝肉成績を前回の鳥取全共の成績と比較すると、月齢は0.2ヵ月長く23.6ヵ月となっており、枝肉重量は455.9kgと前回より15.7 kg大きくなっていました。またロース芯面積も5.5cm²大きくなっており、歩留の点でも良好で、この月齢での総体的な肉量としては高く評価できました。

脂肪交雑はBMS No.の平均が7.4と前回大会と比べ0.2高くなっており、3等級の割合が大きく減少した結果、4等級以上の割合が92.9%とすばらしい結果でした。

この大会から全ての区に採用された脂肪の質評価では、7区のMUF A予測値の平均値は58%で、最小値－最大値は49.6%－64.0%となっていました。

総合評価群の肉牛群第1位は出品番号7～9号牛で、宮崎県から出品の「美徳国」の群でした。この群はBMS No.の平均が10.0であり、また、MUF A予測値も揃って高く、ロース芯が大きく皮下脂肪が薄いことから歩留もすばらしく、肉量・肉質の両面から最高のセットでした。

肉牛群の第2位は出品番号4～6号牛で、岡山県から出品の「新初英」の群でした。この群は肉質面で優等賞1席のセットには及ばなかったものの、5等級の枝肉が揃っていた点で高く評価することができました。

なお、特別賞として、MUF A予測値が全出品牛中最高の64%であった兵庫県の「丸宮土井」の産子である出品番号28号牛を脂肪の質賞に、また、宮崎県の「美徳国」の産子である出品番号7～9号牛のセットを肉質賞に選びました。

総合序列は種牛群の順位と肉牛群の順位とを合計し、値が小さいものを上位とすること等を取り決めた審査基準に基づき序列を求め、その結果に基づき、宮崎県からの出品（種牛群順位：1位、肉牛群順位：1位）を優等賞1席、鹿児島県からの出品（種牛群順位：2位、肉牛群順位：3位）を優等賞2席といたしました。

第8区（若雄後代検定牛群）

この区は、現場後代検定の普及促進と世代交代を早めることに寄与する若く高い能力を有する種雄牛の発掘を狙った出品区です。出品牛の父牛は平成17年10月以降生まれに制限され、父牛の年齢の平均は5.4歳、年齢の範囲は4歳齢から7歳齢までであり、父牛19頭のうちの10頭が現在検定中であるなど、この長崎会場で初めて産子の枝肉成績が披露される

ものも多く含まれています。このような中で、最終的に長崎会場には、1群3頭セットの群出品で、19道県から計57頭の出品がありました。

この区全体57頭の出荷月齢は23.5ヵ月と前回大会よりも0.2ヵ月長くなっていますが、枝肉重量の平均は441.3kgと前回大会よりも12.3kg大きくなっており、7区、9区と比較してもほぼ同程度で、ロース芯面積で4.2cm²、バラの厚さで0.3cm、歩留についても0.4大きくなっていることから、肉量の点での改良が窺えます。

肉質については、BMS No.の平均値が6.3と前回大会よりも0.1良好で、脂肪交雑については前回程度のレベルの出品でした。肉質等級は、5等級が14頭で全体の24.6%、4等級が26頭で45.6%、あわせて4・5率が70.2%を占める成績で、同じ5等級の中でも、脂肪交雑はもちろんのこと、肉のしまりや光沢などがとくに秀でた高いレベルのものも含まれていました。

脂肪の質に関して、MUF A予測値の平均値が57.6%で、最大値と最小値との差が19.6%、標準偏差は3.9%でした。同じ種雄牛のセットの中でもバラツキが見られたセットが散見されたことは、まだこの形質に対する改良や飼養管理技術の確立が過渡期であることの証左と言えます。

優等賞1席は長崎県の種雄牛「福姫晴」、出品番号85～87番の群で、この群は肉質の点で特に優れており、また産肉性が総合的に優れておりました。

優等賞2席は秋田県から出品された「義平福」の産子のセットで、総合的には1席の群に引けを取らない成績でしたが、斉一性の点で1席の群にやや劣る結果でありました。

なお、岐阜県の種雄牛「若光清85」のセットは、肉質得点の順位が1位でありましたが、3頭セットのうちの1頭で、商品価値の高い筋肉である頭半棘筋に瑕疵があったことから、2席の群の後塵を拝す結果となり、惜しまれました。

特別賞については、山口県の種雄牛「勝典平」のセットが、MUF Aの割合が3頭いずれも60%以上で揃っており、非常に望ましく、群として脂肪の質賞に選びました。また、青森県の種雄牛「安平勝2」号の出品番号49～51番のセットが歩留基準値の平均が最も高く、相対的に揃っており、高く評価できましたので、歩留賞に選びました。さらに、鹿児島県の種雄牛「金吉幸」号のセットの出品番号78番の産子は、バラの厚さをはじめとして肉付きの点でとくに優れていましたので、肉付賞に選びました。

第9区（父系去勢肥育牛）

第9区は効率的な肉牛生産を目指し、和牛の肉用牛としての能力の追求と、それらを最大限に引き出す肥育技術の研鑽を目的とした出品区です。今回、38道府県から去勢肥育牛

76頭が出品されました。この区は、種雄牛の生年月日を平成12年10月以降と制限し、その多くは育種価評価によって遺伝的能力が判明しています。この区も和牛の効率的生産を目指す観点から、他の区と同様、24ヵ月齢未満の出荷と、各道府県の通常の出荷月齢よりも4～6ヵ月ほど短くなっており、最大限に和牛の潜在的能力を発揮させる、卓越した肥育技術が求められます。

9区全体において、肥育月齢の平均は23.5ヵ月であり、枝肉項目では枝肉重量の平均は444.8kg、ロース芯の面積は平均59.0cm²、バラの厚さは平均7.6cm、といずれも前回大会を上回る優秀な成績でした。

肉質については、BMS No.の平均が6.5と、前回大会の6.7を若干下回る結果となりました。また、A-5等級に格付されたのは全体の25.0%と前回大会の32.4%を下回る残念な結果となってしまいました。

また、脂肪の質の評価値であるMUF A予測値の平均値は57.4%で、最小値は49.0%、最大値は61.5%でした。

優等賞1席は出品番号108番の牛で、宮崎県の福永透さんが出品した種雄牛「勝平正」の産子でした。この牛は、BMS No.12で、小ザシもあり、肉の色や光沢が優れており、ロース芯も大きく、歩留も高く、抜群の成績でした。また、MUF Aも高いレベルにありました。

優等賞2席は出品番号126番の牛で、熊本県の斎藤誠一さん出品の種雄牛「平茂幸」の産子でした。この牛は、1席の牛と同様、BMS No.12で、歩留も高いといった優れた枝肉でありました。ただ、1席の牛と比べると、脂肪の質が硬く、サシの細かさもやや劣り、惜しまれました。

脂肪の質については、今後、今回審査に用いた近赤外装置によるデータ収集が効率的に進めば、遺伝的能力も評価できるようになります。これまでの肉量や脂肪交雑の改良と同様、脂肪の質についても改良が進むものと思われ、ひいては和牛肉の特徴を際立たせ、食味を一層向上させるものと期待されます。

なお、肉量と肉質からみれば上位入賞が期待された出品牛の中に、瑕疵のために序列を下げた牛がいたことは残念な結果でありました。

名誉賞（内閣総理大臣賞）については、各区の優等賞1席の中から、本共進会の開催趣旨に照らして、その目的を達成したものについて選定を行いました。「種牛の部」については、第7区（総合評価群）宮崎県出品の種牛の部出品番号298～301番（出品者：西諸県支所）、肉牛の部出品番号7～9番（出品代表者：小倉光彦さん）を選び、「肉牛の部」に

については、第8区（若雄後代検定牛群）長崎県出品の出品番号85～87番（出品代表者：長崎県支部）を選びました。

種牛の部の出品牛を通覧いたしますと、全体として新しい種牛審査標準が求める発育良好で、体積に富み、肉用種としての体型に優れ、均称がよく、資質・品位に富む、種牛としての良さを兼ね備えた牛が多く出品されました。一方で、繁殖性と係わる肩の付着や体上線の平直さ、輪郭の鮮明さに惜しまれる出品牛も認められ、新しい種牛審査標準の価値観に即した選抜・保留が求められるところです。

今後、改正された種牛審査標準の適合性を繁殖性や産肉性に係るデータを積み重ねて実証していくことも必要です。新しい審査標準が、繁殖性に係わる直接指標である子牛生産指数に関する育種価情報とともに、繁殖性に係わる遺伝的能力向上に繋がる間接指標として、有効に活用されることが期待されます。

和牛集団の遺伝的多様性の維持拡大と種牛能力の改良を目指して第9回全共から新たに設定された第4区系統雌牛群も、2回目の全共を迎え、各系統の特徴ある遺伝子を保留・固定していく試みに繋がった出品が見られました。今後、地域の特色ある和牛集団の造成を目指すうえで、効果的な実証・展示が行われ、遺伝的多様性の維持拡大に実質的に寄与する取り組みが進展するよう期待します。

肉牛の部については、第9回全共と比較して、肉質レベルについて遜色なく、肉量面上回る成績が得られ、各地で産肉能力の改良が進むとともに、肥育技術の改善の効果が顕著に現れていました。自給率の低下や穀物価格の高止まりの中で、枝肉の生産効率をより向上させることが求められていますが、若齢でも高いレベルの産肉性を実現することが実証され、生産効率向上の課題に十分応えうる可能性を示したものと考えられます。今後は、飼料の利用性にも着目し、生産性の改良に繋がる改良指標の検討を通じ、効率的な和牛肉生産を実現することが強く望まれます。

また、牛肉の美味しさにつながる一価不飽和脂肪酸割合についても十分なレベルに達した枝肉も散見され、より若い月齢で成熟度の進んだ牛肉を消費者に提供できる可能性を示唆するものとして、期待される結果であったといえます。牛肉の美味しさを求める課題は複雑ですが、少なくとも、脂肪の質に関しては、近年、DNAレベルでの遺伝子多型が認められ、脂肪酸の組成に影響することやオレイン酸等の遺伝率が高いこと等が明らかにされてきており、遺伝的能力評価に基づく改良を実現し、美味しい和牛肉を消費者に安定的に供給できる体制を構築できる可能性があると考えられます。

以上、優れた成果を収めた今回の全共ですが、「和牛維新」というテーマに則って、今後10年を展望したより効率的な和牛生産と改良に向けた基盤造りという点に目を向ければ、まだまだ、端緒的な成果といえる段階かと思えます。しかしながら、その可能性については共進会で立派に実証・展示されていきました。この全共をきっかけに、今後の取り組みが強化され、一層の改良の成果が求められるところです。

平成22年、23年と自然災害が相次ぎ、南九州と東北の和牛の主産地が大きな打撃を受けるなど、経済状況の悪化に加えて、厳しい状況が続きました。こうした中で、取り組まれた全共であります。大きな被災を受けた県も可能な限りの最大限の取り組みをして頂き、復興の手がかりとなる成果を見せて頂いたと思えます。今後の一日も早い復興を祈念し、審査報告と致します。

第10回全国和牛能力共進会

審査委員長 吉村豊信